



武田力 Riki Takeda

演出家、民俗芸能アーカイバー

大学では初等教育を学び、幼稚園勤務を経て、演劇カンパニー・チェルフィッチュに俳優として参加。欧米を中心に活動するが、東日本大震災をきっかけに演出家となる。

「警察からの指導」「たこ焼き」「小学校の教科書」など、日常に近いモノコトを素材に、観客とともに現代を思索する作品を展開する。また、演劇における場づくりの手法を用い、滋賀県朽木古屋の「六斎念仏踊り」や、福岡県八女市の「八女茶山唄」など、過疎高齢化した集落の民俗芸能の復活や継承を、地域住民と協働して手掛けている。

近年はフィリピンの国際演劇祭・Karnabalや、中国・上海の明当代美術館で滞在制作。東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて。」展への参加など、活動の範囲を拡げている。

2016, 17年度アーツコミッション・ヨコハマ「創造都市横浜における若手芸術家育成助成」に選定。2019年度国際交流基金「アジア・フェローシップ」ではフィリピンとタイにおける民俗芸能とアートの関係性をリサーチした。2020年より九州大学芸術工学部非常勤講師。2025年より港区地域コミュニティ検討委員。

-index

- 1- 得体の知れない箱で都市を過ごす(2024-)
- 2- 教科書カフェ(2019-)
- 3- 朽木古屋の六斎念仏踊り 継承プロジェクト (2023-)
- 4- たこを焼く(2017-)
- 5- 踊り念仏(2015-)

-Webサイト

<http://rikitakeda.cloudfree.jp/>



1 得体の知れない箱で都市を過ごす

イスラム教やキリスト教、ヒンドゥー教に仏教と、世界的な宗教儀式に共通して見られる「箱を押す」行為。「人間はなぜ箱を押すのか？」——それは宗教を越えた根源的な問いなのかもしれません。本作はそれに倣い、およそ2m四方の大きな箱を山車のように、みんなで押します。そうして自身が抱く宗教観を客観的に捉え、ともに箱を押している異なる宗教を信じる他者へと想像力を拡張します。

箱を押す各人が信仰する宗教は様々です。この真っ白で空っぽな箱になにを祈って押すかは、それぞれです。ただ、信じる宗教はバラバラでも、みんなで力を合わせなければ、この大きな箱は動かせません。道路も凸凹や傾斜があり、ひとりでは、とても目的地まで辿り着けません。

過疎高齢化が進む日本では、民俗芸能など古来より育まれてきた祈りが次々と消滅しています。都市への移住者も、祭りや自治会といった市民活動には多くが関心を示しません。世界でも、紛争や選挙など、宗教観の違いを根底とした争いや分断は絶えない。本作は、こうした宗教観に生じる齟齬を、「箱を押す」という世界に広く共通する宗教儀式を多様な信仰者たちと客観的に演じ、各々が感じたことから、これからの宗教のあり方を対話を通じて探ります。

宗教をタブー視し、無関心を決め込めば、オウム真理教事件から統一教会問題までの30数年のように、課題を放置し続けることになるでしょう。宗教観とは環境によって無意識下に育つ価値観であり、誰しもが抱く思想です。「他者の祈りとは対立するものなのか？ それとも協調し合えるのか？」——身体を用いて多様な祈りのあり方を共有し、ゆっくりと自身の思考を熟成させていく時間は、この分断と争いの時代に、大切なのではないのでしょうか。

- 作品履歴

2024. 12 隅田川 森羅万象 墨に夢（すみゆめ）2024

- レポート記事

祈りの正体を探る「得体の知れない箱で都市を過ごす」

<https://sumiyume.jp/report/6031/>

- 画像

a-c 隅田川 森羅万象 墨に夢（すみゆめ）2024 より

撮影：井波 吉太郎



2

教科書カフェ

小学校での教育は多くの人が経験したことかと思いますが、その教育体験を丁寧に紐解いていくと、一人ひとり随分と異なります。人間が生きていく上で普遍的な営みである教育は受け継がれてきた環境や価値観によって、つまりはこれまでの歴史を解釈する人間によって変化します。いま世代間や地域間に生じている分断は経験してきた教育の違いかもしれません。

この《教科書カフェ》では、日本各地／各時代に子どもが実際に使っていた落書きや書き込みのある教科書を自由に読み比べたり、設置された公衆電話に掛かってくる小学生からの教育に対する問いに答えることで、他者の考え方の源泉を探ります。追憶に眠る「小学生のあなた」の視点から、それより過去の、そして現在の教育のあり方を感じ取ること。その思索は、日本という国家が歴史や時代をどう解釈し、どういう国民を育てたいと意図してきたかをたどる旅でもあります。日本には国による教科書検定があり、それに合格しなければ小学校をはじめとした公的な教育機関で用いることはできないからです。

《教科書カフェ》では、子どもの頃のように教科書を通じて教育を受けるのではなく、教科書を素材に自ら学び、発見していくことで、他者の理解をはかります。その先に、近年よく耳にする「持続可能な未来」はあり得るのでしょうか？「わたしたち」を持続させるのは国ではなく、一人ひとりであるあなた自身なのです。

- 主な作品履歴

2019. 10 奈良・町家の芸術祭 はならあと2019

2020. 4 さいたま国際芸術祭2020

※ 新型コロナウイルス感染拡大の影響から、パフォーミングアーツ部門であった本作は中止

2022. 7-9 HUB-IBARAKI ART PROJECT

2023. 7-11 東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて。」展

- 映像

<https://youtu.be/nfNRe55R-v4>

- 画像

a HUB-IBARAKI ART PROJECT 2022 より

b, c 東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて。」展 2023 より

撮影：大倉英揮



3 朽木古屋の六斎念仏踊り 継承プロジェクト

高度経済成長期を境に過疎高齢化が進み、新たな継承者もないため、2013年に途絶した民俗芸能「朽木古屋の六斎念仏踊り」が、アーティストら「ソトモノ」の参加を得て、どのように復活したのか。映像にはこの芸能が復活を果たした2016年の模様が収められ、手紙には2024年に亡くなった六斎念仏踊りの継承者で、武田にとってはこの芸能の師匠といえるEさんへの想いが手書きで綴られている。

- 映像

<https://youtu.be/CFpY6qdY2H8> (11分10秒)

- 手紙の内容 (抜粋)

Eさんへ

ここには朽木古屋の六斎念仏踊りに関する網羅的な話を、と思っていたのですが、突然のことが起きたので、あなたへの手紙として書きます。映像にも出てくる初めての稽古を振り返ると、僕が勝手に抱いていた恐怖心もあったとは思いますが、それを差し引いても仏の前に鎮座するみなさんの威圧感はずごかった。「こいつ、本当に我々の六斎をやれるのか、いや無理だろう」という視線は、いまでも痛みを伴って覚えています。そんな中でもあなたは二人三脚でこちらに寄り添い、いつも指導と言葉をくれました。そして、古屋の六斎が途絶してから4年ぶりの奉納を、僕を含む集落外の人たちを交えて無事終えられたときに、ちらりと涙をこぼしていたことも知っています。

あなたが亡くなる2日前にも偶然一緒でしたね。「鉦と念仏があって踊りはあるので、とにかく鉦念仏の継承が急務だ。武田さん、次代にしっかりとこれを継いでください」と言われたとき、これからあなたがいる前提で、「まあ特に鉦念仏は根気がないとね、本人たちにやる気がないと」とそっけない返事をしてしまつてごめんなさい。こんなにも人間が呆気なく死んでいくものだとは思っていませんでした。そう、これで古屋六斎の鉦念仏ができるのは僕だけになってしまいました。

- 作品履歴

2023. 7-11 東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて。」展

2025. 9 山中suplex「みんなで響きをランする！」展

- 画像

a-c 映像より抜粋

d 東京都現代美術館「あ、共感とかじゃなくて」展 2023 より

撮影：大倉英揮



4

たこを焼く

フィリピンの多くの人たちはタコを食べません。たこ焼きはこの国の経済成長と比例するように人気の食となりつつありますが、そのたこ焼きにもタコは入っていません。

タコは様々な意味を帯びてきました。覇権国家による大陸侵略を批判する風刺画に。春画における性交中の男性に。一方では福を呼ぶ生物として儀式儀礼にも用いられます。

ところで、日本は先の大戦でフィリピンを統治し、捕虜や民間人を含めて多くの人が亡くなりました。その戦争から80年近くが経つ現在も、マニラ湾にはたくさんの船と遺体が沈んでいます。タコは隠れられる場所を住处とします。遺体も食べます。

なにを次代に継ぐ和解とし、ともに更新していけるのか？移動式屋台を〈劇場〉に、出会いを生み出したこ焼きを〈俳優〉に、道ゆく人たちを〈表現者〉にと巻き込みながら、国家や資本経済とは別種の仕組みを構築するスラムへ。侵略と抵抗の両義を持ち、戦没者を食して生きるタコに、観客一人ひとりが思う「戦争」を重ねて体内に宿すことで、戦争記憶の継承を図ります。

- 作品履歴

2016. 8 象の鼻テラス (横浜) ※ワークインプロGRESSとして上演

2016. 11 明当代美術館 (中国・上海) ※ワークインプロGRESSとして上演

2017. 5 Karnabal Festival (フィリピン・マニラ)

2018. 5 釜ヶ崎芸術大学 (大阪)

- 映像

<https://youtu.be/fJX2vq0g6cM>

- 画像

a-e 映像「CNN Philippines」によるインタビュー より

2017, Manila/film by Samantha Lee ©CNN Philippines



5-1 踊り念仏

横浜市の山手警察署員との会話（抜粋）

署員 演劇...どんなものをやるんです？

武田 お客さんが俳優になって、そのお客さんがこの街を歩く作品です。

署員 いま外を歩いているじゃないですか。その人たちを...。ごめんなさい、ちょっとよくわかってない。

武田 いま話を伺って、聞き取ったその基準をそのまま「条件」としてお客さんへ伝えて、普段とは違う感覚でこの街を歩いてもらおうと。

署員 それはなんのためにやるんですか？「これから街の異物になろう」とお客さんがバラけるじゃないですか。それで戻ってきて「どうだった？」という話？

武田 個々人が無意識に規定している「日常の線引き」を改めて捉え直す試みなんですよ。 「歩く」行為と「パフォーマンス」行為との違いはどこにあるんですか？

署員 「パフォーマンス」と「歩く」？

武田 という行為の違い。みんな歩いていますよね？

署員 いや「道路使用」として、なにをするかがわかっていればまだ...

武田 「表現の自由」は憲法で規定されているじゃないですか？それとは抵触している...

署員 それは「〈個人の〉表現の自由」で、たとえば「変なことやってるなあ」という人がいるじゃないですか。それはその人の自由なんですけれども、それを集団でやるとなると...

武田 個人だったら良い？

署員 ちょっと難しいですよ、警察として「良いですよ」というのは。面白いとは思いますが...

武田 わかりました。ありがとうございました。



5-2

「主体的に都市や社会に関わろうとする行為」を、この作品では「踊る」と呼びます。わたしたちは日々都市や社会と踊っているのか、もしくは無意識のうちに都市や社会に踊らされているのか。

道路交通法77条によって禁止されている「各公安委員会の定める一定行為」とは、どのような行為を指すのか？ 各公安委員会＝その地域の警察署で「この土地における一定行為とはなにか」を質問し、その模様を録音。文字起こしをした上で、当日参加する観客に配布します。そして、観客一人ひとりがその聞き取った内容を自身で解釈をし、異物としてその都市／社会と対峙します。そのとき、どのような身体で以って都市／社会との関係の再構築を図れるのか？ これはそもそも「踊る異物」であったわたしたちが、都市や社会との相互関係性を取り戻そうとする作品です。

- 作品履歴

2015.2 神奈川・井土ヶ谷 (Blancclass 共催事業)

2015.2 神奈川・横浜 (ST スポット横浜 主催事業)

2015.4 大阪・此花 (無職・イン・レジデンス 協働事業)

2015.12 神奈川・本牧 (本牧アートプロジェクト 主催事業)

2018.8 東京・阿佐ヶ谷 (TERATOTERA 主催事業)

2020.10 大分・大分 (大分県立美術館 主催事業)

- 映像

<https://www.youtube.com/watch?v=a0E1TD-ytf8>

- 画像

a-e 大阪・此花での《踊り念仏》より

©2015, Osaka/photo by Seiji 'Takakhan' Takahashi

